

ゴッホと南仏アルル

和田先生の大変解りやすいご講義《一味違うフランス観光案内》。魅力あふれるフランスの旅も今回で終わりを迎える事となりました。コロナ感染の脅威を感じつつの一年間でしたが、コロナ感染対策も十分に施して頂き、無事に終わることが出来ます事を嬉しく思っております。最終回の今回は我々日本人にも知名度抜群のゴッホが愛した『南仏アルル』の旅へと案内して頂きましょう！



(2月21日、授業風景)

1, 【アルルについて】

【古代】

- ・紀元前5世紀ギリシャ人によって創設。
- ・ケルト民族による占領。
- ・紀元前1世紀カエサルの下、ローム川河港町でプロヴァンス地方随一の都市として発達。
- ・円形闘技場、共同浴場等、ローマ建築の遺跡。
- ・4世紀コンスタンティヌス大帝時代「ガリアの小ローマ」として最盛期。



(アルルのコロセウム)

【中世】

- ・アルル王国。
- ・ロマネスク様式のサン・トロフィーム教会。

【近代】

- ・19世紀鉄道の敷設→アルルは路線から外れる。
- ・水運業不振→アルルは荒廃。
- ・1888年ゴッホのアルル滞在

【現代】

- ・観光都市アルル
- ・世界文化遺産：「アルルのローマ遺跡と
ロマネスク様式建造物群」



サン・トロフィーム教会

2・【ゴッホの生涯】



(ゴッホの自画像)

- ・1853年、オランダ南部のズンデルトで父が牧師の子として生まれる。
 - ・1869～1875年、画商グーベル商会の店員になるが、宗教心が強く
 - ・1876～1880年、聖職者への志望（アムステルダム・ブリュッセル
等で伝道師（仮）として活動。
- ※1880年、画家になる決意。

◆画家での時代（10年間の内半分はオランダで、半分はフランスで活動）

27歳・・・画家になることを決意。

- ・オランダ時代1881～1885年：エッテン、ハーグ、ドレンテ、
ニューネン→低所得者層の人物画（97作品）

- ・フランス時代1886～1890年

○パリ時代 1886年2月末～1888年初頭 →明るい絵

自画像（28作品）、風景画（79作品）、静物画（80作品）

○アルル時代 1888年2月20日～1889年5月

南仏の風景画（105作品）

○サン＝レミ時代 1889年5月～1890年5月

○オーヴェール＝シュル＝オワーズ時代 1890年5月～7月

3, 【南仏へのあこがれ】

◆南仏アルルのイメージ

※1886年南仏ローヌ川の氾濫で大きな被害→パリで被害者救済キャンペーン

- ・『クーリエ・フランセ』（1886, 12, 6）挿絵入り雑誌
- ・エドブリング 「洪水の後の豊穰」太陽=後光

◎フィンセントのパリ時代にテオ・ファン・ゴッホが所蔵していたアルバムと雑誌リスト

※「太陽の祭典」

- ・1886年12月23日～87年1月6日、南仏の洪水被害の為の募金活動
- ・産業館等パリ各所
- ・南仏の演出：パリで紹介。家屋、風車、天井に南仏の太陽を見立てた巨大な照明、音楽タンブーラン、舞踏ファランドール、アルルの女たちの踊り等々→新聞・雑誌の記事 (le Chat noir 1886,12,18)

※「アルルの女」

- ・アルフォンソ・ドーデ『風車小屋だより』収録「アルルの女」
- ・ドーデ戯曲、ジョジュール・ビゼー付随音楽『アルルの女』
→再演時に大成功を収める
二つの組曲に編曲する。「アルルの女」は劇中に登場しない人物
- ・ゴッホの5点の『アルルの女（ジヌー夫人）』
※ジヌー夫人は「カフェ・ド・ラ・ガール」
（《夜のカフェ》の舞台）の女主人。「黄色い家」の前の住人



(アルルの女)

※ゴッホは1888年2月、南仏に旅立つ

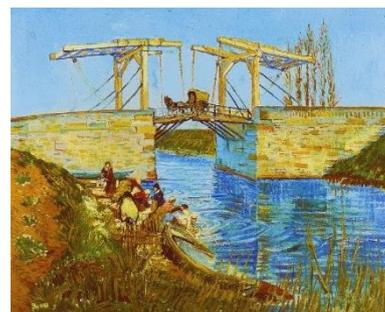
春になったら・・・2月、あるいはもっと早く南フランスに行くかもしれない。青の色彩と陽気な色彩の土地だ。(イギリス人画家・リーヴェンス宛書簡。1886夏～秋。或いは1887)

4. 【アルルのゴッホゆかりの名所】

※色彩を求めて

- ・2月「アルルの冬景色」→3月「ラングロワの橋」
(南仏の陽光の下での色彩) →4月
「花咲く果樹園」連作

(ラングロワ橋)



◆『ラングロワの橋』(1888年3月)

・4点は油彩画。1点は水彩画。

※スケッチ

2. 「君(ベルナール)に手紙を書く約束をしていたので、まず、豊かな雰囲気と陽気な色彩効果と言う点で、この土地が日本の様に美しいと言っておこう。

太陽と色彩を愛する多くの画家達にとって、南仏に住み着くことは本当に有益だろう。

・色彩と太陽：この位置に太陽は見られない。



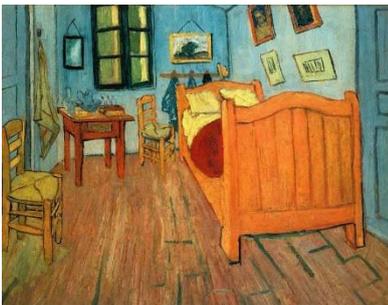
1888年 モーガン・ライブラリー、ニューヨーク

3. 「ベルナール宛に書いた夕日と人物と橋の絵は、悪天候の為に壁にぶち当たっている。

(テオ宛 書簡B2)

「小さき馬車が通っている跳橋で、青い空にその側面が浮かんでいて・・・。同じように青い川と、草がオレンジ色の土手にキャラコを着た色んな色の帽子をかぶった洗濯女が固まっている所・・・。

(ゴッホの手紙 テオ宛)

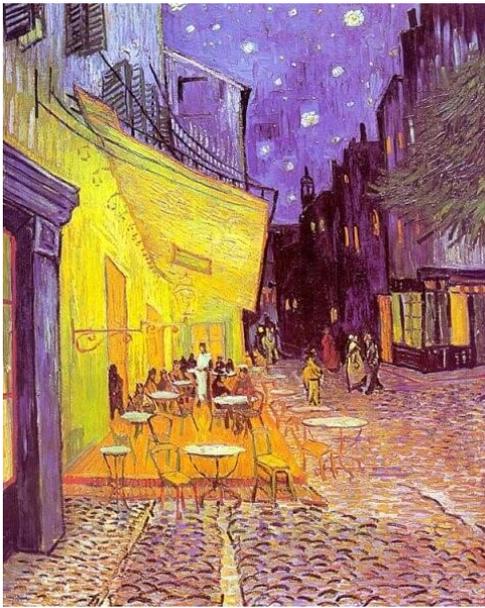


(アルルの部屋)



(黄色い家)

◆夜のカフェテラス



(夜のカフェテラス)

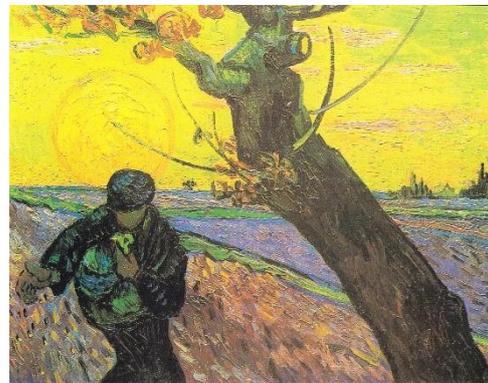


(カフェ・ファン・ゴッホ)

5. 【太陽とひまわり】



(種をまく人)



◆太陽のモチーフ

・『種をまく人』(1888年6月、11月)：8点に太陽のモチーフ

※印象派画家にとっての太陽：モネは日の出、日没、あるいは陽光に照らされた風景は描くが
昼間の太陽を直接的に描く事はない

☞ 『小説を読む人』(1888年11月)

※ゴッホはミレー「種をまく人」を尊敬していた

※教会から太陽へ

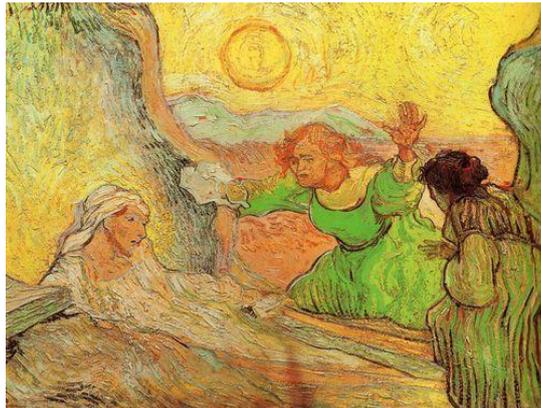
- ・オランダ時代：農作業と教会の組み合わせ
- ・パリ時代～アルル時代：農作業と太陽の組み合わせ

※置き換え：宗教のモチーフ→自然のモチーフ（自然化）

※レンブラントの銅版画「ラザロの復活」の模写（1890）



（レンブラント『ラザロの復活』）
銅版画



（ゴッホ『ラザロの復活』）
模写

- ・サン・レミ療養院で精神病の治療を受けていた時期の作品
- ・キリスト→太陽
- ・ラザロ＝ゴッホ
- ・マルタとアルマに見守られながら太陽の下で蘇生
- ・南仏の太陽による復活

※太陽の意味

- ・「ここ（南仏）の太陽を信じない者は本当の不信心者だ。神の様な太陽のほかに悪魔のようなミストラルが吹いている。（書簡520）」

☞神＝太陽

※神に代わる「自然」(太陽)

5・「ああ、親愛なる弟よ、僕には自分の望んでいることがとてもはっきりとわかることがある。人生においても、絵画においても、僕は神様などなしにやっていけるが、僕の様な苦しみの多い人間は、自分より大きな何ものか、僕の生命力となり搜索する力となるようなものなしにはやっていけない。絵の中で僕は、音楽の様に慰めを与えるものを表現したい。僕は男たちや女たちを何か永遠なものと共に描きたい。かつては円光がその象徴だった。僕らはそれを光の輝きそのもの、僕らの色彩の震えによって追及する。」(テオ宛、書簡531)

☞「教会」のモチーフ

- ・パリ時代～アルル時代(1887～1890)には意味のある教会モチーフは現れない。
- ・サン・レミ時代以降に教会のモチーフが再び現れる(『星月夜』)
- ・オーヴェール時代・『オーヴェールの教会』 他5点。
※オランダ時代の様に農耕のモチーフと組み合わせられていない。



◆『ひまわり』の連作(1888年8月、1889年1月)

- ① パリ時代の「ひまわり」4点
: テーブルの上に置かれたひまわり
- ② アルルの時代の「ひまわり」7点(6点現存)
: 瓶に差されたひまわり

・「黄色い家」を装飾するため複数枚の制作

6・ゴーギャンと一緒にアトリエで生活するという希望を持って
アトリエを装飾するのは、大きなひまわり以外にない。

・「ルーラン夫人ゆりかごを揺する女」を中心にして

両脇に「ひまわりの」絵を2点飾る
というアイデア(書簡1889年)

→祭壇画のイメージ

・ひまわり = 地上の太陽

・黄色い家:

太陽とひまわりに守られた
芸術のユートピア



6. 【アルルと「日本」】

◆南仏＝ 「日本」

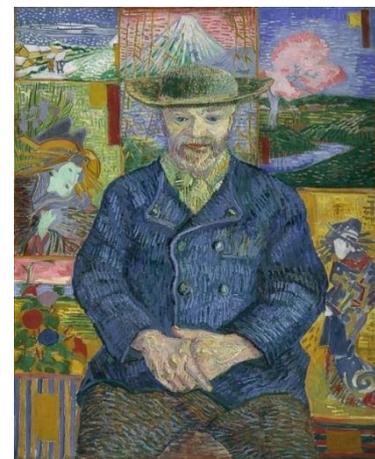
- 7、「違った光を見たいと思ったし、いっそう明るい空の下で自然を眺めたら、日本の版画の感じ方や描き方が一層正確にわかるだろうとも思った。」
(書簡605)
- 8、「パリからアルルに向かう途中の感動は 日本に来たのじゃないかと目を凝らすほどだった。」
(ゴーギャン宛の書簡 B22)
- 9、「この天気は相変わらずいいし、画家の天国どころかまるで日本そのものだ」
※日本にあこがれている。
(テオ宛 書簡543)

◆ジャポニズム → 日本ブーム

- ・ 1856年頃版画家ブラックモンによる「北斎漫画」の発見
- ・ 19世紀後半の万博：1867年パリ万博に日本参加
- ・ 浮世絵の影響→ゴッホも浮世絵を所蔵
- ・ ゴンクール兄弟の日本美術工芸品の収集
- ・ ピエール・ロチ『お菊さん』(1887)・・・蝶々夫人
- ・ 『芸術の日本』刊行・・・サミュエル・ピンクの月刊誌
- ・

※『タンギー爺さんの肖像。(1887)

- ・ タンギー爺さんのユートピア的社会主義→日本画家
- ・ 仏陀の様な正面観・左右対称
- ・ 仏僧の彫刻
- ・ 浮世絵の描写



(タンギー爺さん、1887年)

※ゴンクール兄弟『マネット・サロモン』 → 日本通

10, 日本の画帖から夢のような国が彼の前に現れた。パリの灰色の一日や凍えるような寒空を逃れだし忘れようとしていた時、ランプの光が日本の幻想を破ったのである(『マネット・サロモン』)

☞『パリ・イリュストレ』誌の日本特集号に記載された日本の気候・風土を紹介「日本の春はイタリアの春と同じく心地よい。春は光に満ちて花がいっぱい咲いている。」

※『ムスメの肖像』（1888年7月）

- ・1888年6月ピエール・ロチの『お菊さん』を読む。
- ・「ムスメ」という日本語
- 1 2. 「ムスメとは少女 あるいはとても若い指す言葉であり、日本語の中で最もきれいな言葉の一つで小さな口を尖らせる (moue) と愛嬌のある顔つき (frimousse) という風味がある様に思われる。
- ・ゴッホも南仏の少女をモデルに「ムスメ」を描いている。



『ラ・ムスメ』（1888）

※『仏僧としての自画像』

- 1 3, 「自分の個性を強調して、永遠なる仏陀の素朴な
崇拝者である仏僧の性格を描き出そうとした」
(ゴーギャン宛、 書簡544a)

※ゴッホの日本人イメージ

- 1 4, 「自分自身が花で有るかのように自然の中で生きる。このような単純な、日本人が教えてくれるものこそ、まずは真の宗教ではないだろうか。

因襲的な世界で教育され働いているが、自然に立ち返らねばならないと思う。」(書簡542)

※日本を絶賛している→ゴッホの理想・・自然に身を託する。

- ・宗教的な日本イメージ→ゴッホの理想の投影
- ・キリスト教に代わる「真の宗教」
- ・トルストイの影響 (自然への回帰、ロシアの農民=自然人)
- ・「自然宗教」 大地に根ざした自然宗教→素朴さにかえる。

※アルルにおける共同体理想

- ・日本の芸術家たちにあこがれつつ共同生活。
 - ・「黄色い家」に12脚の椅子を購入→用途の模倣
 - ・新しい教会=芸術家の教会
 - ・友情肖像画 (ゴッホ、ゴーギャン、ベルナール) :
肖像画の交換→肖像によるユートピア表現
- ☞ゴーギャンは1888年10月アルルに来る。
→ブルターニュ地方の神秘的な雰囲気を楽しむ。
「耳きり事件」(『包帯をした自画像』1889)



包帯をしてパイプをくわえた自画像
(1889年1月)

- ：背景に浮世絵。
- ・最後のジャポニズム肖像画

7、【結び】

※ゴッホの3つの時代における絵画の主要テーマ

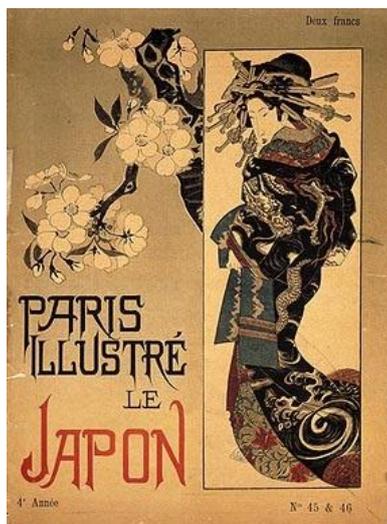
- ① オランダ時代：「人物画」→キリスト者として農民・労働者への愛のまなざし
- ② パリ時代：「自画像」→自己省察 「風景画」「静物画」→印象主義の洗礼
- ③ アルル時代：「風景画」→自然宗教（太陽・ひまわり・日本）

最終回の《一味違うフランス観光案内》の旅はゴッホが愛した『南仏アルルの旅』です。
私たち日本人に一番馴染みの深いフランスの画家は何といても「フィンセント・ファン・ゴッホ」
ですね。オランダ時代→パリ時代→アルル時代へと居住地が代わるに従い、画風・絵の対象が大きく変化
していく姿には大変興味深い物がありました。実際訪日することなく37歳の若さでこの世を去ったゴッ
ホですが、とりわけ「日本の風景」「浮世絵」に大きな関心を持っていたゴッホ。我々日本人と心が通じ
合えるものがあるのでしょうかね。

一年間解りやすくご講義をして戴いた和田先生。

観光地フランスの旅を大変興味深く味わう事が出来ました。有難うございました!!

(記) 桐澤 久子



『パリ・イリュストレ』（1886年）